

GLOBAL

VOLUNTEER



国内／海外

グローバルボランティア

2025年度活動報告



グローバルボランティアとは？

「グローバルボランティア」は、普遍教育の教養展開科目「キャリアを育てる」の一科目で、全学の学生に開かれている。国内外のNPO/NGO、施設、国際機関、フィールド等におけるボランティア活動に従事し、「体験から学ぶ」機会を提供している。

2025年度は、国内は外国につながる子どもとの交流と学習支援のプログラム、海外はスリランカとバングラディッシュの2か国への派遣を実施した。「自分と相手と社会の三面鏡～相手を知り、自分が関わる意味を見つけていく～」をクラス全体の標語とし、26名の学生が参加した。

授業のねらいは、グローバル社会における課題を発見し、多様な視点から現実社会の理解を深め、その課題と向き合っていくために必要とされる考え方、幅広い教養、実践的な知識を身に着けることである。したがって、ボランティア活動の前に目的意識を高める事前学習の受講を必須としており、活動後も、活動から得た経験知や実践知を再び理論的知識と結びつけたり、再構築したりしながら、自らのキャリアに繋げていくための振り返り（事後学習）を行っていく。さらに、経験を言語化し、他者へ伝える力を育てるための報告書の執筆についても単位修得の条件となる。

これまでの受講学生は、ボランティアとは「自分のできること」をするだけに留まらず、「自分のできることを広げる」ことであり、「成果」よりはむしろ「プロセス」を重視した活動であることを発見した。活動は、今まで知らなかった社会を知り、周囲の人々から大きな刺激を受け成長するための「通過点」になると同時に、自分自身が周囲に対して「インフルエンサー」となる機会にもなる。活動後の学生の歩みは一律ではない。自分の知識や技術の不足を痛感し、自分の専門性について強く意識しながら今後の勉強につなげていこうとする学生もいれば、自分の適性や問題意識の根幹に気がつき、進路を変える学生もいる。

本授業の受講を通し、グローバル社会において自らが取り組むべき課題を定め、自分なりの取り組み方を模索し、今後も向き合っていけるよう、思考し、試行し続ける力をぜひ身につけてほしい。経験を「キャリア」に結びつけるのも、単なる「思い出」として終わらせてしまうのも、自分次第である。

授業のながれ

受講ガイダンス

ボランティア説明会

事前学習

履修必須 ⇒ 1単位

ボランティア活動
50時間程度

+

事後学習

事後学習後、活動報告書の提出 ⇒ 2単位

WHAT IS "GLOBAL VOLUNTEER" ?

03 グローバルボランティアとは

ACTIVITY REPORTS 活動報告

04 スリランカ さゆみ合同会社
2025

06 バングラデシュ エクマットラ
2025

08 外国につながる子どもとの交流プログラム「ななめ大学」プロジェクト他
2025

COLLABORATING ORGANIZATIONS 協力団体

10 NPO法人多文化フリースクールちば/
NPO法人AMIGO PROJECT / NPO法人おりがみ

11 エクマットラ JAPAN / さゆみ合同会社/
Possible Dreams Foundation

"GLOBAL VOLUNTEER" ON THE WORLD MAP

12 世界地図で見るグローバルボランティア

AFTER ACTION REPORTS

14 2021-2023年度 岡本久平さん

15 2018・2019年度 坂東麻衣さん

16 2016年度 緒方彩夏さん

17 2020年度 菅原七恵さん

PAST RECORDS IN PICTURES

18 写真で見る過去の記録

ME AND "GLOBAL VOLUNTEERS"

20 繋がる「グロボラ」の輪：ウガンダから世界、そして未来へ

21 私とグローバル・ボランティア

SYMPOSIUM

22 座談会

EDITOR'S NOTE

編集後記

スリランカ



実施協力団体：さゆみ合同会社

国際教養学部1年 Mさん / 法政系学部2年 Sさん / 文学部2年 Tさん / 看護学部2年 Tさん / 国際教養学部2年 Fさん



国際教養学部2年 Hさん / 国際教養学部2年 Mさん / 国際教養学部4年 Oさん / 国際教養学部4年 Iさん



今年から始まった私たちの「やりたい！」の詰まったGVスリランカプログラム

国の概要 スリランカはインドの南東部に位置する島国で、1948年にイギリスから独立しました。面積は北海道よりもやや小さく、約2,204万人の人々が暮らしています。国民の約7割が仏教を信仰しており、次いでヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教が信仰されています。街には寺院や教会といった宗教施設が多く見られます。看板には主にシンハラ語、タミル語、英語が表示されており、多くの人々がシンハラ語を話しています。スリランカの中心地であるコロンボにはビルが立ち並ぶ一方、内陸部に入ると自然豊かな土地が広がっており、象や南国の鳥など、日本では見られない生物が生息しています。気候は年間を通じて温暖で、新鮮なフルーツが路上で売られているのをよく見かけます。一次産業が盛んに行われており、特に紅茶はセイロンティーとして有名で、内陸の高地の気候を活かした良質な紅茶が生産されています。スリランカが抱える問題としては、都市部と農村部の間で教育や医療に格差が存在することが挙げられます。

体験談 私にとって今回参加したスリランカでのグローバルボランティアプログラムが、人生で初めての海外経験でした。最初は不安もありましたが、現地の人々が自然にかけてくれる笑顔や気さくな声かけに触れ、文化や言葉が違って人の温かみは共通なのだと実感しました。また、ボランティア活動を通して、価値観や生活習慣の異なる人々と関わることで、自分の「当たり前」と異なる国での「当たり前」を比較でき、世界の広さを肌で感じる事ができました。地域交流は他のプログラムでは味わえない日常の異文化に接する機会であり、教室や本からでは得られない発見に満ちており、大きな学びとなりました。この経験は、将来自分がどのように社会と関わり、どんな形で貢献していきたいのかを改めて考え直すきっかけにもなりました。帰国した今でも、スリランカで出会った人々とのつながりと、自分の中に広がった新しい視野が大切な財産になっています。

このプログラムでしか学べないこと

「ボランティアとは何か」の根本から深く考えさせられました。「支援」の動機が無意識に利己的なものになっていないか。現地ですべてに必要とされているものは何か。そこに自分たちはどう関わっていけるか。実体験を通して、活動後も深められます。また、内容を自分たちの興味に沿って作っていただけるのも魅力の一つです。

次に参加したいボランティア

もう一度スリランカを訪れてより実践的な活動を行いたいと考えています。今回の留学で得た学びを活かして現地で長期的な交流や学習を行い表面的な部分のみならずその地域、社会が抱えている問題まで視野を広げて活動することができればと思います。行って終わりではなく、グローバルボランティアとしての継続的な活動を行いたいです。

「支援」ではなく共に知り、共に学んだ、私たちの明日をつくる経験

GV・スリランカ向きの人

- ・ニュースの向こう側を、自分の目で見たい人
 - ・実際にやってみるのが好きな人
 - ・人との交流が好きな人
 - ・スパイスとフルーツでエネルギーチャージしたい人
- ニュースで見るスリランカは実際のスリランカのほんの一面です。幅広い社会問題に触れるので、やりたいことがない、普通の留学はいまいちピンとこない人にこそおすすめです。

スリランカのごはん

3食カレー！と言われるくらいカレーをよく食べますが、他にもご飯や麺の炒め物やビリヤニ、ナシゴレンなど、日本とは違う食文化を楽しめます♪マンゴーや新種のバナナのみならず、ランブータンなど初めて見るフルーツもたくさん食べられます！青唐辛子に気を付けて、紅茶だけでないスリランカを食からも体験してみてください！

活動内容

スリランカ留学中には、まず現地の学校を訪問し、日本文化の紹介や折り鶴体験を通して生徒と交流し、互いの文化理解を深めました。また、病院およびがんセンターを見学し、医療現場の実情を学ぶとともに、院長と医療課題や今後の改善点について意見交換を行いました。さらに、地域のインフラ整備を支える橋づくりに参加し、住民との協働の大切さを実感しました。加えて、在スリランカ日本国大使館を訪問し、両国の歴史的つながりや交流の現状について説明を受けました。最後に、特産品である紅茶やスパイスを購入し、地域産業への理解を深める良い機会となりました。これらの経験を通じて、異文化理解だけでなく、医療や教育、社会基盤に関わる多面的な学びを得ることができ、将来の国際協力への意欲が一層高まりました。また、現地の人々との対話や共同作業を通して、文化や価値観の違いを理解しながら協力する姿勢の重要性を強く実感しました。私の視野を大きく広げる機会となり、とても貴重な時間になりました。

体験談

特に印象に残っているのは、現地のさまざまな学校を訪問し、現地の子どもたちと交流したこと。一緒に折り紙をしたり、おにぎりを作ったり、日本の四季や食文化、言語の紹介をしたりと私たちに日本の魅力を伝えるにはと試行錯誤し取り組んだプログラムだったので、子どもたちが興味を持ってくれたり、作った折り紙を大切に保管してくれたのがとても嬉しかったです。また、1日だけ生徒さんのお家にホームステイさせていただくという貴重な経験もさせていただきました。私は日本語がとても上手な生徒さんのお家に泊まらせていただいたのですが、いつも使っている日本語の教科書を一緒に見ながらお話をしたり、英語でご両親と会話したりと、思い出に残る素敵な経験となりました。文化交流を通してスリランカの文化を学ぶだけでなく日本の文化を改めて学ぶことができたのは新鮮でしたし、このような双方の文化に触れる経験ができたのはグローバルボランティアならではの感覚だと思います。

バングラデシュ



実施協力団体：エクマツラ
国際教養学部4年Iさん／教育学部4年Kさん／国際教養学部3年Oさん／教育学部3年Mさん／国際教養学部2年Kさん



国際教養学部2年Nさん／国際教養学部2年Hさん／工学部2年Yさん／国際教養学部1年Sさん



首都ダッカでの活動

活動内容

首都ダッカでは、まず初めにストリートチルドレン達と紙飛行機対決や風船リレーなどの運動会をし、子どもたちの元気に私たちもたくさんのエネルギーをもらいました。その後、路上生活者が多い地域でエクマツラのレスキュー活動を見学し、実際に路上で生活している子ども達に話を聞きました。子ども達の路上にきた経緯や日々の生活を聞いて、やりきれない思いを感じる場面もありました。さらに、馬車や船、リキシャを利用して喧騒とカオスのオールドダッカを散策し、ダッカ最大のコライルスラムを訪問しました。スラムでは家庭を訪問し、生活する人々の生の声を聞きました。私たちからの質問に丁寧に答えくださり、中でも印象に残っていることは現地の人の1人が、今の生活に満足していると話していたことです。ボランティアとはなにか、深く考えるきっかけになりました。訪れるまでは暗い印象ばかりでしたが、たくましく暮らす人々の姿に触れ、非常に沢山のことを感じ、学んだ時間を過ごしました。

このプログラムでしか学べないこと

ストリートチルドレンとの交流やアカデミーでの活動を通して、貧困や子どもの教育を自分事として考えられることが特徴です。スラムやアカデミーの女性や子どもたちとのかわりを通して、支援する側・される側という枠組みを超え、現地の人々の力強い生き方からエネルギーをもらえます。

体験談

最後の3日間はUBINIGという有機農業をやっている現地の農村NGO団体を訪問したのですが、そこにはたくさんの素敵な出会いと時間がありました。農村2日目の夜に、農村に古くから伝わる農民の方々の魂の唄を鑑賞しました。太鼓や鍵盤を用いて農業の繁栄を願う唄で、とても心が癒されました。私たちも一緒になって日本の歌を歌うなど、もう二度と過ごせないような思い出に残る一夜を過ごしました。私たちが宿泊した場所は平和でしたが、現地のポリスが警備してくれて、彼らと一緒にバンブーの工房などの見学をしました。彼らといろいろな会話をして仲良くなり、なんと警察署に招いていただきフルーツとお菓子を振る舞ってくれました。最終日には私たちを見送りにきてくれるなど、とても親切にしてくれました。本当にバングラデシュの方々のホスピタリティが素晴らしく、「帰りたくない」と本気で思うほどかけがえのない出会いと時間でした。心からバングラデシュという国と人々が大好きになりました。

バングラデシュの基礎知識

バングラデシュはインドの東に位置する国で、首都はダッカです。人口は1億7千万人と多く、世界的にも人口密度の高い国として知られています。ベンガル語を公用語とし、国民の約90%がイスラム教徒です。稲作を中心とした農業や縫製産業が経済を支えています。フレンドリーな人たちが多く、温かい雰囲気の良い国でした。

エクマツラアカデミーで子どもたちと交流した3日間

バングラデシュの乗り物事情

バングラデシュの主要な交通手段は車とリキシャです。リキシャは日本の人力車由来のもので、多くの人々が利用しています。交通事情としては、信号や横断歩道がほぼなく、車間距離がとても近く、クラクションであふれています。今回のプログラムでは、リキシャの他に馬車や船にも乗りました。

バングラデシュの食べ物事情

バングラデシュのお米の消費量は日本の約5倍です。大量のお米をカレーや魚、ダルという豆のスープなどと一緒に食べます。フォークやスプーンは使わず、右手で器用に食べます。食後や休憩の時間にはとても甘いチャイを飲みます。チャイを飲む時間が、仲間や家族とコミュニケーションをとる大事な時間です。

活動内容

2泊3日でエクマツラアカデミーを訪問しました。アカデミーはダッカからバスで5時間ほど離れた郊外にあり、多くの子どもたちが暮らしています。彼らは元々ストリートチルドレンであり、エクマツラによって保護された子どもたちです。まず、アカデミーの紹介を受けたあと、併設しているハンディクラフト工房を訪問しました。工房で働く女性の話がとても心に残りました。子どもたちとは、一緒に夕食を食べたり、遊んだりして交流しました。2日目の朝は朝食のためのパン作りをしました。朝食後は、ごみ収集ゲーム・釣りを通じて子どもたちと関わり絆が深まりました。昼は近くにある少数民族ガ口族を訪問し美味しいご飯をごちそうさせていただきました。アカデミーに戻ったら音楽会です。自分達の国の歌を発表した後、お互いの国の歌を教え合いました。夕食の後は火を囲みながらプログラムの参加者と本心で語り合う熱い時間を過ごしました。3日目は子どもたちの朝礼に参加した後、涙のお別れであったという間の3日間でした。

体験談

アカデミーで私が最も胸打たれたのは、子どもたちの心の豊かさです。アカデミーに到着した初日、見知らぬ日本人である私たちに、子どもたちのほうから手を引いて一緒に遊んでくれました。ボードゲームをしていても全く勝てない私に自分が負けてまで勝てるよう誘導してくれたり、折り紙をたくさん折ってプレゼントしてくれたり、彼らの純粋な他者への思いやりが強く印象に残っています。また、将来の夢を尋ねると即座に答えられない子どもはいないくらい、しっかりとした意志を持って生きているということを実感しました。ある子どもに「夢は何?」と聞かれて私が明確に答えられなかったときの「ないの?!」というあの驚きの顔は今でも忘れられません。一度きりの人生を、ビジョンを持って楽しく生きるためのお手本の一つを見させてもらったような気がします。学校の科目のような教育ももちろん重要ですが、自分に関わる多くの人と豊かな人生を築いていくための、お互いの心を育む教育の大切さを教えてくれました。



実施協力団体：千葉大学国際教養学部「ななめ大学」プロジェクト/NPO法人多文化フリースクールちば/
Mirai Global-ミラグローバル/認定NPO法人外国人の子どものための勉強会/ワークショップ講師：青山悟氏
国際教養学部4年Mさん/国際教養学部2年Yさん/教育学部2年Eさん/教育学部2年Sさん/国際教養学部1年Sさん

日本社会を子どもの視点から捉え直し、新たな世界に触れた時間

活動内容

私たちは、外国につながる子どもたちを千葉大学に招き、アートワークショップを通じた交流活動を行いました。事前学習では、子どもたちが所属する団体の方にオンラインでお話を伺ったほか、多文化フリースクールちばを訪問し、外国につながる子どもへの理解を深めました。当日のワークショップでは、大学生がサポート役となり、子どもたちと一緒にフェルト刺繍で「身近なモンスター」を制作しました。「身近なモンスター」とは、たとえば少し怖い先生や癖のあるクラスメイトなど、普段は口に出しづらいけれど心のどこかに引っかかる人や物を表すコンセプトです。活動中、学生たちは子どもたちと対話しながら、テーマ決めや材料選びを一緒に行いました。最初は「モンスター」の概念をうまく伝えることに苦労しましたが、制作が始まると子どもたちは集中して取り組み、最後にはいきいきとした素晴らしい作品が完成しました。今回の活動を通して、子どもたちも大学生も、言葉では表現しにくい思いや経験をアートを介して表現できることを実感できたのではないかと考えます。

体験談

私は、本活動で初めて外国にルーツを持つ方と交流しましたが、言葉や文化の違いで壁を感じることは全くありませんでした。ともに作業する中で、ものの見方に違いを感じることはありましたが、そのような違いは、会話のきっかけや相手への関心を深めるものとなりました。このような体験を通じて、私や外国ルーツの方々には言語や文化的背景が異なるものの、それ以前に一人の人間であることを実感しました。

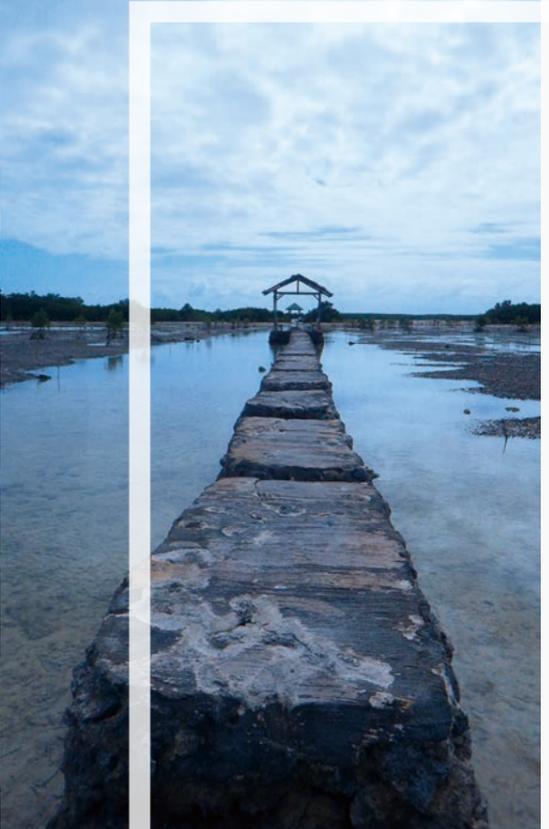
また、次回の機会があるのなら、ともに活動する参加者のルーツについてもっとお話をしたいです。事前学習で移民の方について学び、十分な配慮をしようとした結果、相手をよく知ることができなかつたため、本末転倒にならぬよう相手との会話を楽しむことを大事にしたいです。

このプログラムでしか学べないこと

外国につながる子どもたちの生の声を聴くことができることだと考えます。現在日本には、多くの海外につながる子どもたちがいます。直接話をするだけで、想像するだけでは分からない言語の壁や、彼らなりの困難などの現状を知ることが出来ました。この経験を通し、直接話をする事の大切さを学びました。

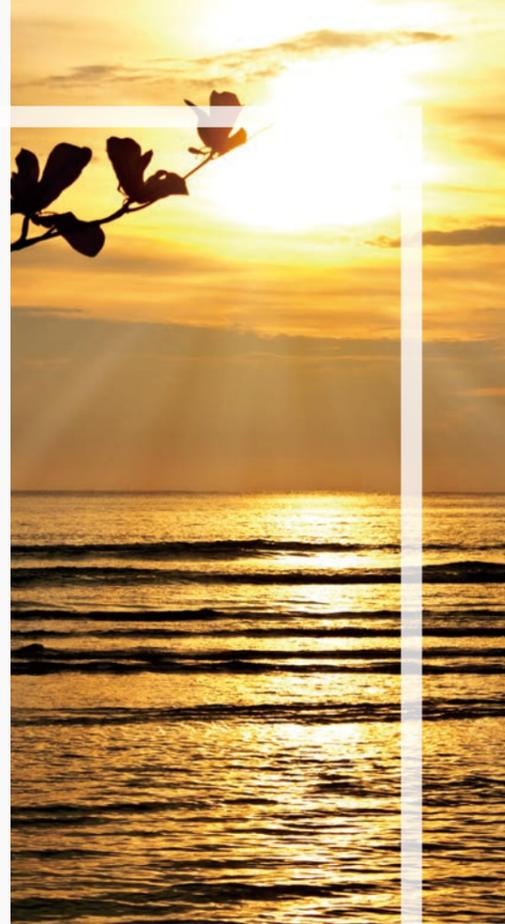
次に参加したいボランティア

今後は長期的なボランティアに参加したいと思います。継続的な関わりの中で信頼関係を築き、日本に住む外国ルーツの子どもたちのために自分にできることを見つけていきたいです。また、直接関わることでしか得られない学びが多くあるため、多様な背景を持つ人々と交流する機会を今後も積極的に持ちたいと考えています。



協力団体

COLLABORATING ORGANIZATIONS





団体概要と主な活動内容

本スクールは、2014年に設立しました。その目的は、母国や日本の中学校を卒業しているにもかかわらず、日本語が十分でないために進学できなかった外国につながる生徒を、高校につなげようというものです。これまで350名ほどの生徒が参加し、帰国や転居した者以外の殆ど

の生徒を実際に高校に進学させています。

ただ、1年間の授業で入試に合格でき、高校の授業についていける日本語を身に付けさせるのは大変です。そのため、年間約220日、1日4時間の授業を行っています。また、親の都合による来日とバラバラの来日時期、アルバイトの必要がある家庭などさまざまな困難を彼らは抱えています。そのため、細かいところまで気を配るように少人数のクラスを作り、生徒に寄り添って指導しています。

メッセージ

本スクールの問題点の一つは、「閉鎖集団」になるということです。生徒たちは仲間内ですぐに仲良くなりますが、それが日本人や日本社会とのつながりとはならないのです。学生の皆さんに継続的な日本語学習を指導してもらうことは難しいとは思いますが、閉鎖的になる生徒たちへ日本人や日本社会との「窓口」になって欲しいと思います。この間、千葉大学生と行っている「佐倉ツアー」などはその典型だと思っています。



団体概要と主な活動内容

エクマツトラとはベンガル語で「皆が共有する一本の線」という意味で、バングラデシュでストリートチルドレンの支援を行っている団体です。

青空教室などのフィールド活動や、路上でのレスキュー活動、エクマツトラアカデミーの運営など、子どもたちが教育に触れる機会の提供から社会の中で自立するまで、長期的なビジョンを持ち現地で活動を行っています。

そうした路上生活をする貧困層の子どもたちへの直接的な支援と共に、富裕層の人々にも自国の社会問題を自分自身の問題として認識してもらうために、映像制作による啓発活動も行っています。

バングラデシュに存在する気の遠くなるような格差を超えて、子どもたちが手を伸ばせばチャンスをつかむことができ、人々が自発的に路上の子どもに手を差し伸べ、皆が手を取り合える世界。

「エクマツトラ」は、そんな社会の実現を目指し名付けられました。

メッセージ

20年という活動の中で、創立当時小さな子どもだった子たちが、エクマツトラに来てチャンスをつかみ、努力をし、大学生となり、立派に仕事をして社会に羽ばたいていく姿を見てきました。

エクマツトラの活動は、生まれた環境に関わらず全ての子どもたちが機会を得られれば、愛情と教育により成長し、大逆転できることを証明しています。

私たちは彼らの可能性を本気で信じ、次世代のリーダーとなり得る「心のエリート」を育てています。

あなたも私たちと一緒に可能性に満ち溢れた子どもの未来と一緒に創っていきませんか。

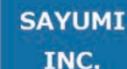


団体概要と主な活動内容

代表理事カルロスはペルーで生まれ、中学校2年生で来日。経済的に困難な状況で、アルバイトをしながら好きな仕事を見つけました。現在は日本とペルーの架け橋として旅行会社に勤務しています。また、ペルー人の仲間とNPO法人AMIGO PROJECTを立ち上げて、外国ルーツの子どもたちの支援に取り組んでいます。Amigo Project が取り組む Mirai Global (ミラグロ) という教室では、「高校を卒業したら何がしたい?」「先輩たちはどうしたんだろう?」という思いの外国ルーツの若者を対象に、外国ルーツの仲間や同じ経験をした大学生や社会人との「ミラグロ」での出会いによって未来が変わると信じて活動しています。

メッセージ

大学生の皆さんとアートを通じて交流し、キャンパスを訪れた経験は、外国ルーツの中高生・若者にとって、将来を身近に考える貴重な機会となりました。ミラグロに参加する若者の多くは、日本社会や進路について模索の途中にあります。大学生の皆さんとの出会いや何気ない対話は、「自分にも次の選択肢がある」と感じるきっかけとなっています。このような交流が、若者にとっての一步となると同時に、大学生の皆さんにとっても、多様な背景を持つ人と関わる学びの機会となっていれば嬉しいです。Muchas Gracias!!!



団体概要と主な活動内容

さゆみ合同会社は、2025年夏にはじめて9名の千葉大生をスリランカへ派遣しました。これまでスリランカに里子をもつ日本人の里親を対象としたスリランカツアーを25年以上行ってきたメルビンと、千葉大学人文社会科学研究所博士課程を卒業したサジーの夫妻2人で主に活動を行っています。

「グローバルボランティア」のスリランカプログラムは、学生さんの希望や意見を取り入れながら、スリランカ出身のわたしたちがオーダーメイドでつくっています。都市部にある日本語を勉強している中高生が通う学校や病院だけでなく、普通の観光客が行かないような農村や外国人に会ったことのない人々がたくさん暮らしている地域を訪れて交流の機会をつくっています。

メッセージ

南アジアに位置するスリランカへ行く機会は少ないと思いますが、私たちは参加して下さる方々の興味関心に合わせて一緒にプログラムを考え、それを安全に叶えるお手伝いをします。ホームステイや学校訪問など、現地の人との交流ができ、日本や観光では体験できない経験が得られます。私たちと一緒に、日本とスリランカをつなぐあなたのグローバルボランティアを作っていきましょう。



団体概要と主な活動内容

NPO法人おりがみは、魅力的なボランティア活動の機会を、大学生・高校生や若手社会人に届けることを活動内容とし、福祉や環境、教育、文化といった多様な分野のボランティアプログラムを開発・提供してきました。その一つが、「四街道学習支援ボランティア『ようこそ』」です。本

事業は、千葉県内に暮らすアフガニスタン出身の家庭の子どもたちを主な対象とした学習支援で、アフガニスタン・コミュニティと協働しながら運営しています。日本語や学校の勉強につまずきを感じている子どもたちは少なくありません。しかし、その背景には、来日の経緯や家庭環境、文化の違いなど、テストの点数だけでは測れない事情があります。「ようこそ」では、大学生ボランティアが子ども一人ひとりに寄り添い、宿題のサポートや基礎学習、日常的な会話を通して、安心して過ごし学びに向かえる時間と空間をつくっています。勉強を教えること以上に、「地域の中に自分の居場所がある」と感じられることを大切にしている活動です。

メッセージ

外国にルーツをもつ子どもたちは、学校や地域の中で孤立しやすく、日本社会とつながる“きっかけ”を得にくい状況にあります。このままでは、学習の遅れだけでなく、社会との距離そのものが広がってしまう可能性があります。千葉大学の学生の皆さんと連携したいのは、単に勉強を教えるだけではありません。子どもたちにとっての「身近な日本人」「話しかけられる大学生」として関わること、その存在自体が、日本社会への大切な窓口になります。勉強を一緒に考えたり、雑談をしたり、同じ時間を過ごす中で、子どもたちは少しずつ外の世界へ目を向けていきます。ぜひ、この取り組みに参加し、共にその一步をつくってもらえたら嬉しいです。



団体概要と主な活動内容

レソト王国のハ・セカンツィという小さな村で村の人々の生活向上のためにコミュニティベースで活動を行っています。これまでにスキルトレーニングやリテラシープロジェクト、ミシンのプロジェクト等を通して村の人々の経済状況や教育環境の向上やエンパワーメント

を実現させてきました。現在もそれらを行いながら、2021年から新しくカメラを使った教育活動や村の中に施設を建設するプロジェクトも始めています。本団体のメンバーのみで活動を行うのではなく、村の人々と対話をし、協力しながら活動を行っています。本プログラムは基本的にレソトの首都と村を行き来しながら活動を行います。首都では行政の方とミーティングを行うこともあれば、村で撮影した動画を編集したりすることもあります。村では村の生活を村人から教えてもらいながら活動します。

メッセージ

本プログラムは始まったばかりの新しいもので、まだ駆け出しのプログラムに参加し、コミュニティの人々と対話を繰り返しながら行っていくのが特徴です。だからこそ現地の人々により寄り添った活動ができるのに加え、参加者の皆さんが現地でやってみてみたいと思ったことを新しいプロジェクトとして実行できるかもしれません。想定外のことが起きることもありますが、それも含めて多くのことに挑戦したい方にオススメのプログラムです。



世界地図で見るグローバルボランティア

PAST PARTICIPANTS 過去の海外プログラム参加者

アメリカ

2014	CIEE	Y.S
2014	JPRN	M.T
2014	JPRN	H.E
2015	CIEE	Y.S
2015	JPRN	K.S, K.C, M.H, S.T
2015	CIEE	M.N
2016	CIEE	S.I
2016	JPRN	M.T, S.Y
2016	CIEE	H.F
2017	CIEE	H
2017	JPRN	T

インド

2014	ICYE	M.G
------	------	-----

インドネシア

2015	NICE	M.S, K.F, Y.H
2016	NICE	K.U, K.K
2016	NICE	Y.H
2017	Gakuvo	K
2018	Gakuvo	K
2019	ICYE	Y

ウガンダ

2018	ICYE	M
2018	NICE	K
2019	ICYE	B
2020	ICYE	K

オーストラリア

2014	CIEE	R.Y
2015	CIEE	M.Y
2017	CIEE	S
2017	CIEE	S
2018	CIEE	K
2018	CIEE	U
2018	NICE	M

カナダ

2014	CIEE	A.T
------	------	-----

カンボジア

2017	NICE	H
2017	NICE	N

グルジア

2014	NICE	Y.T
------	------	-----

ケニア

2019	NICE	M
------	------	---

スイス

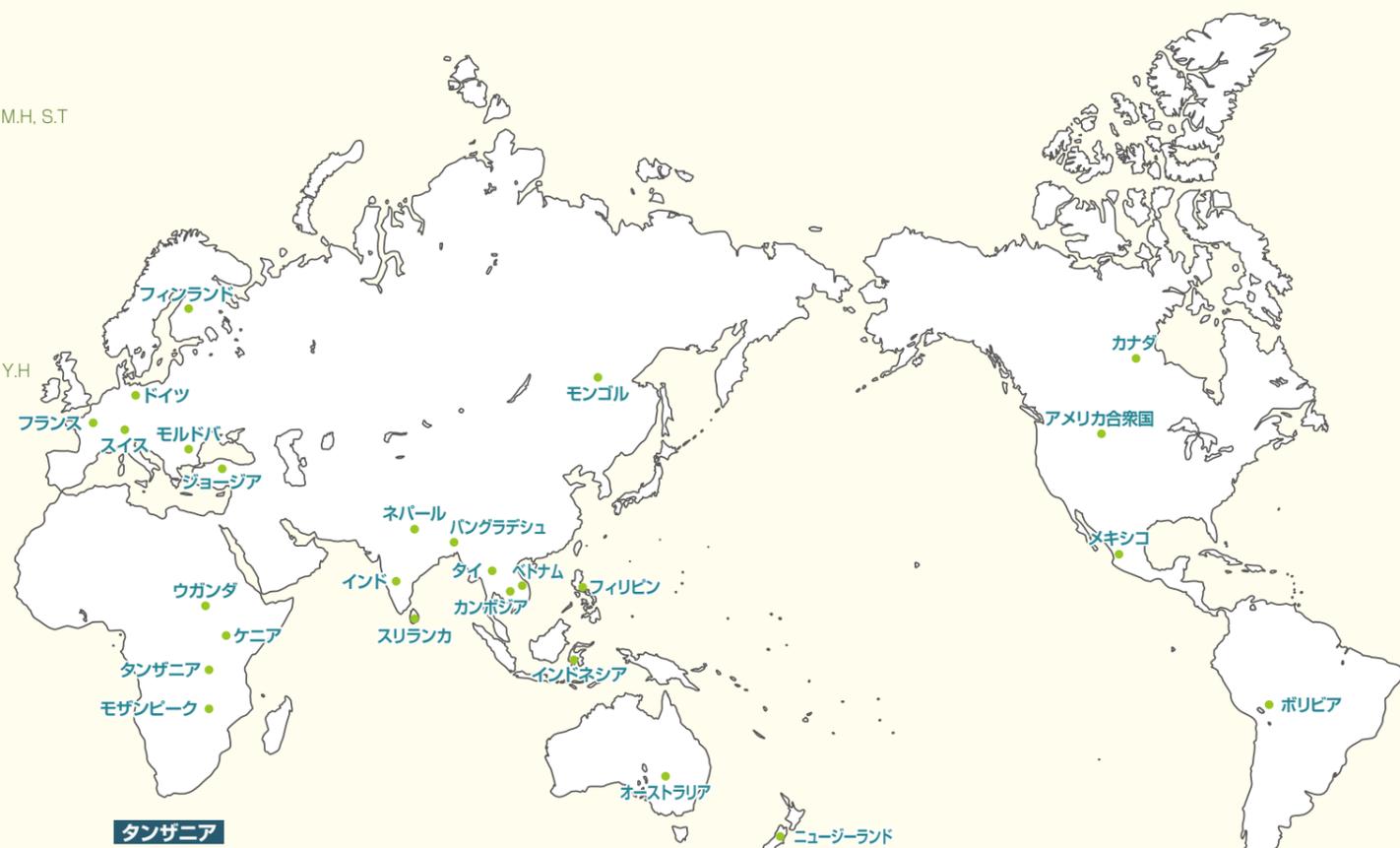
2019	NICE	N
------	------	---

スリランカ

2014	good!	T.N
2014	good!	S.A
2015	good!	Y.I, S.T, H.T
2016	good!	H.I, A.O, M.S, Y.S, S.R
2017	good!	O
2018	good!	H
2025	さゆみ合同会社	Y.I, S.O, K.M, T.F, Y.H, K.T, R.S, M.T, Y.M

タイ

2014	NICE	S.M
2016	NICE	Y.A, Y.N, R.K



タンザニア

2018	NICE	W
------	------	---

ドイツ

2015	CIEE	A.A
2016	NICE	T.T
2019	NICE	K

ニュージーランド

2016	CIEE	K.N
2019	CIEE	M

ネパール

2014	ICYE	Y.S
------	------	-----

バングラデシュ

2023	エクマツラ	O
2023	エクマツラ	K
2023	エクマツラ	Y
2023	エクマツラ	T
2023	エクマツラ	K
2023	エクマツラ	H
2025	エクマツラ	A.I, S.K, M.O, N.M, N.K, M.N, H.H, A.Y, T.S

フィリピン

2014	NICE	T.T
2014	NICE	Y.M
2014	NICE	A.A
2017	ICYE	N

2018	ICYE	M
2019	NICE	U
2019	ハロハロ×DAWN	U
2020	セブンスピリット	M
2022	ICYE	T

フィンランド

2016	NICE	E.F
------	------	-----

フランス

2018	NICE	K
------	------	---

ベトナム

2013	ICYE	M.H
2022	ICYE	H
2022	ICYE	H
2022	ICYE	S
2022	ICYE	S
2022	ICYE	S
2022(春)	ICYE	Y
2022	ICYE	F
2023	ICYE	H
2023	ICYE	O
2023	ICYE	A

ボリビア

2016	NICE	R.I
------	------	-----

メキシコ

2015	ICYE	N.I
------	------	-----

モザンビーク

2018	NICE	O
------	------	---

モルドバ

2019	NICE	A
------	------	---

モンゴル

2014	NICE	A.O
2017	good!	I

レソト

2023	Possible Dreams Foundation	M
2023	Possible Dreams Foundation	S
2023	Possible Dreams Foundation	S

国内ボランティア参加一覧

ICYE・来日生サポート

2015	A.T
2015	Y.M
2015	Y.M
2016	T.H
2016	M.K
2017	R.W
2017	H.N
2018	N.M
2018	N.H
2019	M.Y

NICE ワークキャンプ

2019	S.C
------	-----

イクレイ日本

2014	A.M
2015	K.I.I
2016	Y.M

移民コミュニティとの交流

2020	Y.I
2020	Y.M
2020	E.M
2020	A.K
2020	E.I
2020	R.H
2021	M.S
2021	A.K
2021	I.S
2021	M.T
2022	M.T
2022	M.N
2022	K.O
2022	M.Y

映像で考える移民難民

2020	N.S
2020	Y.M
2021	A.I
2021	K.O
2021	K.I
2021	Y.I
2022	H.N
2022	C.N
2022	M.S
2022	H.S

劇団あけぼのプロジェクト

2015	R.K
2015	T.U
2015	W.
2017	S.T

さほうと21

2021	T.A
2021	M.O
2021	R.N
2022	M.U
2022	A.C
2022	S.I
2022	N.F
2022	S.S
2022	S.K
2022	Y.S

多文化フリースクールちば

2016	T.I
2016	A.Y
2016	T.Y
2016	Y.H
2016	K.S
2017	H.K
2017	Y.T
2018	H.M

徳之島虹の会

2018	E.F
2020	H.Y
2020	Y.O
2020	M.O
2020	A.T
2020	K.T
2020	Y.S
2020	A.Y
2020	W.O
2021	H.O
2021	Y.H
2021	S.M
2021	F.N
2021	Y.K

成田国際空港

2013	Y.A
2013	U.T
2014	H.M
2014	S.Y
2014	C.T
2014	K.K
2014	Y.N
2014	M.F
2014	R.I
2014	C.A
2014	H.Y
2015	N.K
2015	S.K
2015	H.F
2015	Y.T
2015	K.N
2015	Y.S
2015	M.S

福島子どもカプロジェクト

2014	A.T
2014	N.S
2014	S.C
2014	R.F
2014	R.I
2014	D.H

我孫子市国際交流協会

2013	H.L
2014	M.M
2014	K.F
2014	S.I
2015	M.N
2015	H.I

千葉市立高浜第一小学校

2018	A.O
------	-----

難民支援ボランティア

2017	A.S
2017	Y.Y
2018	M.W
2019	M.N
2019	S.S
2019	M.N
2019	M.A
2019	R.K

外国につながる子どもとの交流イベント Chiba Media Art Project

2025	N.M, M.Y, S.E, M.S, C.S
------	-------------------------

四街道学習支援

2025	R.H, M.K, Y.K
------	---------------

ヒューマンライツ・ナウ

2016	C.T
------	-----

フェアトレードちば

2014	U.S
2014	R.K
2014	M.F
2015	S.S
2015	T.N
2015	T.T
2016	M.O



きっかけ

私は大学入学前から、ボランティアなど学生が中心となって活動することのできるものがしたい!と様々な大学を探していました。

コロナ禍で学校も行けていない中、大学受験の勉強をしていた高校3年生の春、偶然目にしたのがとある新聞の記事でした。

「疎外された人の声に敏感であれ」その言葉に心打たれ千葉大学の志望を決めたことを覚えています。大学入学後はコロナの時期だったこともあり、グローバルの授業自体も主にオンラインでの開講となりましたが憧れの授業を受けられることが嬉しかったです。

PROFILE

- 参加時期：①2021年度、2022年度・大学1～2年生
②2023年度・大学3年生
プログラム：①グローバルボランティア国内（映像で考える移民難民プログラム）
②グローバルボランティア海外 NPO法人エグマッタ（バングラデシュスタディツアー）



参加

大学1年時では、新宿のミャンマーコミュニティを訪れたり、牛久にある入管施設でお話を聞いたり、オンラインではありましたが映画祭を実施するなど様々なことを経験することができました。

大学2年時では念願の対面での映画祭を実施。多くの人を巻き込んで活動を行うことの楽しさと知識や実情を知ってもらって行動に移してもらうことの難しさを同時に実感する経験となりました。

大学3年時では授業での学びをきっかけにバングラデシュへ渡航。短期間でしたが、日本との違いの多さにカルチャーショックを受けっぱなしでした。実際に目で見て経験することで沢山のことを得られた滞在でした。

参加後

大学4年間を通して、グローバルで多くの経験や知識を得た私は、社会課題解決を仕事にしたいと思い就職先を探すようになりました。授業以外でも、多文化フリースクールちばでのインターンや学習支援ボランティアの経験で得られた現場の人の声にアンテナを張り続けるという姿勢は今の仕事に活きていると思います。まだ働き始めて日も浅いですが、色々な方と積極的に接して、声に耳を傾ける機会をいただけるように意識しています。

TURNING POINT 1

大学入学前
グローバルについての新聞記事を見つける。学生が主体となって社会課題を訴えるイベントを実施したということに魅力を感じる。

TURNING POINT 2

1年夏
移民や難民の支援者、当事者の方々とお話をしたり、入管の施設を訪れたりと本やネットなどで知ることのイメージと実際に聞き出すことの違いを知る。

TURNING POINT 3

2年冬
映画祭を対面で実施する。大学内外の方をお呼びして、実施することができた。参加者が現状を知ることのきっかけに、アクションに繋げるためにどのようにしたらよいのかについて考えた。

TURNING POINT 4

3年夏
バングラデシュへ渡航する。自分たちとほぼ年齢が変わらない若者たちが学校へ行けず、路上で生活しているという現状を知る。生まれた環境で本人の生活が決まってしまう状況を無くしたいと思った。

現在 公益財団法人職員

公益財団法人 日本財団に就職する。国内の部署にて、ボランティアについて扱う団体を担当したり、在留外国人支援に関する新規事業の立ち上げに関わったりしている。常に現場から得られることを大切にしている姿勢で仕事に取り組んでいる。

きっかけ

高校生のときにアフリカの貧困地域の様子をテレビで見て、自分の全く知らない世界では現在でもきれいな水すら手に入らない生活をしている人たちがいることに対して自分に何かできることはないかなと考えるようになりました。まずは実際に現地の問題を自分の目で見てみたい、自分にできることに挑戦してみたいという気持ちからアフリカでのボランティア活動に興味を持ちました。

大学入学後、グローバルボランティアを経験した方からお話を聞き、ひとりで現地に溶けこみ自分の頭で何をすべきか考えながらボランティア活動に取り組みたいと思いました。そのため、ICYEを通してウガンダのNPOでの活動に参加を決めました。

PROFILE

- 参加時期：①2018年度・1年生
②2019年度・2年生
プログラム：①ウガンダ派遣 (ICYE)
②ケニア派遣 (NICE)



TURNING POINT 1

1年夏 ウガンダでのボランティア
ウガンダで5週間、保健・衛生関連のボランティアをした。はじめてのアフリカは自分の知らなかったことばかりで、毎日驚きの連続であった。生活においてもボランティアにおいても困難が多々あったが、アフリカを好きになるきっかけとなった。

TURNING POINT 2

2年夏 ケニアでのボランティア
ケニアで7週間、貧困地域の衛生環境改善に向けたボランティア活動に取り組んだ。2度目のアフリカで、ウガンダの時とはまた少し違った環境での生活を体験することができ、視野が広がったと実感した。

TURNING POINT 3

4年秋～春 ケニア留学
さらに詳しくアフリカの衛生問題について勉強したいと思い、ケニアのジョモ・ケニヤッタ農工大学保健学科に8ヶ月間留学をした。現地の学生と意見交換をしながら学びを深めることができ、とても貴重な経験になった。

卒業後～現在 就職

アフリカでのボランティアや留学を経験して、今後はアフリカにビジネスで貢献したいと思い、アフリカ事業に強みを持つ商社に就職した。気づけばもう3年目になったが、これからもっと成長してアフリカの発展に貢献していきたい。

参加

ウガンダの首都から離れた農村地域で、現地のNPOでの活動を行いました。具体的には、孤児のための学校の建設や貧困改善を目的とした集会、エイズ患者の訪問とカウンセリングの手伝いなどを行いました。ボランティア活動の内容も初めから具体的に決まっている訳ではなく、現地の人とどんな活動をすれば地域の方々の生活を改善することができるかを話し合い、行動に移していったことは大きく自己成長につながったと思います。

また、そこでは私も現地の方々と同じ生活を経験することができました。飲み水は池の水、トイレは穴があるだけの簡易的なもの、洗濯も手洗いで日本では絶対に経験することがないような体験ばかりでした。

参加後

何か自分にできることがしてみたいという気持ちで参加したボランティアですが、実際には現地の人にいろんなことを教えてもらったりたくさん助けってもらったりでウガンダの人たちにはとても感謝しています。私ひとりにできることは限られていたのですが、アフリカでの経験を通して今後アフリカの生活環境の改善に向けて自分にできることを探し行動していきたいと考えるようになりました。

その後ケニアでのボランティアや留学を経験して、今後はより持続的に、大規模にアフリカの成長に貢献していきたいと考えアフリカ事業に強みを持つ商社への入社を決めました。これから大好きなアフリカに少しずつ恩返ししていきたいです。

きっかけ

海外旅行に行くのが好きで、空港という場所にワクワクする気持ちを持っていました。English Houseを頻りに利用したり、積極的に留学生と関わったりしていたので、もっと英語を使って実践的に活動してみたい！と思い、グローバルボランティアへの参加を決意しました。海外プログラムも気になっていましたが、体育会女子バスケットボール部に所属しており、練習や大会を休むのが嫌だったので、部活動と両立できるプログラムを探しました。教員になる道も、就職活動をする道も選択肢にあり、世界中から様々なお客さまが集まる『空港』という場所でのために働いてみたい！英語を使って仕事してみたい！と成田国際空港でのボランティアに手を挙げました。



PROFILE

参加時期：2016年夏
プログラム：成田国際空港ご案内ボランティア

TURNING POINT 1

2年夏
夏期語学研修プログラムを利用し、オーストラリアのモナシュ大学にて4週間の英語研修に参加。初めて英語を使って生活するという経験をし、ますます異文化交流と英語に興味を持った。

TURNING POINT 2

2年秋～3年夏
留学生のチューター、千葉県国際交流センターでのインターンシップ、障がい卓球大会ボランティア等、様々な活動に挑戦。主専攻で学ぶ教員としての道以外にも、自分がどんなことに興味を持っているのか探るきっかけにもなり、卒業後の進路を考える機会を多く得ることが出来た。

TURNING POINT 3

卒業後① 2018年春～
日系航空会社のグランドスタッフとして成田国際空港に勤務。チェックインカウンターや搭乗口、フライトブリパレーション等を担当。世界各国から多くの人々が集まり、旅の始まり・終わりとなる空港での勤務は非常にやりがいがあった。お客さまのことを第一に考えながらも、仕事として利益を生み出す必要がある点でボランティアとは異なる面白さを実感した。

TURNING POINT 4

卒業後② 2023年夏～
青年海外協力隊としてエジプトで体育隊員となる。海外でボランティア活動を行うのは初めてであったが、これまでの国内ボランティアの経験や空港勤務で世界各国の人々と日々接していた経験が活かされた。エジプト日本学校でエジプト人に日本式教育を伝える活動を実施。

参加

実際に参加してみると、多くのお客さまが自分の案内に対して「ありがとう」や「日本は本当におもてなしが素敵」などと声を掛けていただけたことも多く、働くことに対するやりがいを実感することができました。英語を使って活動することは初めてでしたが、相手に伝えたいことがきちんと伝わった時には非常に嬉しかったのを覚えています。また、活動回数を重ねるうちに、「必ずしも正しい文法で話す必要はない」ことを学びました。自身もそうですが、英語が母語ではないお客さまも多く、コミュニケーションをとる時は、いかに相手のことを考えて、わかりやすくご案内するか、が大切であると気付きました。

参加後

参加時には卒業後の進路は全く定まっていなかった。教育学部であったので、漠然と教員になる道も考えたこともありました。ボランティア活動を行い、1日中空港にいても全く苦に感じませんでしたし、むしろ、やりがいや達成感を覚え、活動後は満足感を味わうことが出来ました。この経験は、空港で働くという道を選択肢として考えるきっかけとなりました。そして、大学卒業後は日系航空会社のグランドスタッフとして成田国際空港で勤務しました。グローバルボランティアを通して学んだ、「相手のことを考えたコミュニケーションの仕方」を活かすことができたと感じています。

きっかけ

高校生の時に英語のディベート大会に参加した際、日本は移民を受け入れるべきか否かというテーマで議論をしました。当時は労働力や治安、多様性など大枠のエビデンスや数値を集めることに必死でしたが、実際にどんな深い問題があるのだろうと思い、難民に関わる体験活動をしている学生団体FELicetoに入会しました。そこでグローバルボランティアの存在を知り、映像で考える移民・難民プログラムを選択しました。当時はコロナ禍真っ只中であり、海外ボランティアや留学はほぼ不可能でしたが、今思えばこのプログラムに参加したことが今ここで自分にできることを深く考えるきっかけになったと思います。



PROFILE

参加時期：2020年度
プログラム：映像で考える移民・難民



TURNING POINT 1

2020年4月～
コロナ禍ですべての授業がオンラインに。移民や難民に関わる活動ができるFELicetoに入会し、素敵な仲間と出会う（今も交流があります）。グローバル「映像で考える移民・難民」プログラムに参加し、「日本で暮らす移民との関わり」についての動画を作成し、多くの方々にご視聴いただいた。

TURNING POINT 2

2021年4月～
難民映画祭を毎年1回開催。参加者を広く募り、難民が発生する国の社会的、政治的背景を専門的な側面から学びながら映画を見た。社会人、大学生が混ざり合ってディスカッションを行い、率直な意見を交換し合えた。

TURNING POINT 3

2021年5月～
さぼうと21で学習支援を始める。親、子どもそれぞれが外国にルーツがあることで感じられる壁（学校の手紙や受験の制度など）を知り、日本で普通に暮らすことの難しさを知る。子どもたちと花火をしたり、ゲームをしたり、楽しい思い出もたくさん出来た。

TURNING POINT 4

2024年4月～
かねてより航空会社に興味があり、日系の航空会社に就職し、客室乗務員として働く。様々な国籍の方々と接することで、宗教やその国独自の文化に触れる機会が増え、刺激が多い日々を過ごす。今後、社会人としてもボランティアの機会を見つけていきたい。

参加

1年目は難民の現状を世の中に伝えたり、生活を支えたりされている方々と学生を招いたオンライン勉強会を開催し、オリジナル動画を作成しました。2年目以降はゲストトークを交え、難民に関する映画を学内放映する難民映画祭を開催しました。映像という伝わりやすい媒体のおかげで、多くの方々に興味を持っていただけたことが嬉しかったです。

これらを通して普段自分が日本人として生活していると気づくことはない、世界の移民や難民の現状、特に日本の入管が抱える問題に興味を持ちました。また、日本社会における外国人との共生に力を尽くしている社会福祉法人の活動を知ることができました。

参加後

自分も現場で動いてみたいと思い始めたのが社会福祉法人さぼうと21での学習支援活動でした。様々な理由で日本に移住してきた、外国にルーツのある子どもたちに勉強を教えていましたが、子どもたちは明るく毎回元気をもらっていました。また、学部では主に法律を専攻していたので、入国管理局の実態や難民認定制度のプロセスに興味を持ち、仲間と牛久の入国管理局を訪問しました。現在は日系の航空会社で客室乗務員として働いています。国内外の路線を日々乗務する中で、空港にいる国境を越えようとする人たちがどんな想いを抱えているのかを想像する習慣があるのはグローバルでの活動があったからです。



アフリカ地域を訪れたときに道端で食べたご飯



南アフリカの伝統的な料理バーニャウ



お祭りのときのポップ (とうもろこしの粉)



よく遊びにきていた子どもたちと



生活に必要な水汲みのお手伝い



ウガンダでのボランティア認定書を現地の方々と



子どもたちに囲まれて撮った一枚



2ショット



高田馬場のミャンマーコミュニティを訪れたとき



東中野にあるポレポレという映画館を訪れたとき



牛久入管に訪問したときに建物の前で



難民支援ボランティア
大学祭：Meal for Refugees



難民映画祭：セッションの進行



レソトの村の子どもたちと一緒に歩いて2時間かけて学校に行くときの写真



タンザニアで子どもたちにアルファベットの書き方を教えるボランティア



セブ島の子どもたちとスポーツ



セブ島の子どもたちと一緒に

繋がる「グロボラ」の輪：ウガンダから世界、そして未来へ

「先生には是非10年の振り返りを書いてほしいです！」昨年度の報告書でそう熱烈にお願いした、前年度TAのBです。気づけば私は、この「グローバルボランティア（通称：グロボラ）」に学生生活の6年間を捧げ、どっぷりと関わってきました。

私のグロボラは、アフリカに行きたいという希望を抱いていた入学早々、一冊の報告書を手にしたことから始まりました。そこでウガンダの子ども支援に携わっていた先輩の姿を知り、「私もこうなりたい」と強く憧れを抱いたのです。その先輩に相談した際、「日本人がたくさんいる環境よりも、自分一人の環境の方が得られるものがある」とアドバイスをいただき、大学1年生の夏、佐々木先生の後押しもあってウガンダの孤児院へ行くことを決めました。

当初は「支援者」として何をすべきか、何ができるかという正解を探して空回りしていましたが、ある時、自分は「支援する側」である前に「一人の人間」として彼らと向き合っていないことに気づきました。大切なのは、何かを教えることではなく、一緒に笑い、共に時間を過ごす中で信頼を築くこと。そう気づいてからは、現地のスタッフや子どもたちとの距離が劇的に縮まり、彼らの生活のリアルを肌で感じるこ



結婚式にて先生にスピーチをしていただいたあとの写真



ウガンダで子どもたちとの写真



孤児院の子どもたち

2024年度 融合理工学府卒業生 坂東 和真

とができました。「何かをしてあげたい」という驕りが消え、「自分には何も無い」と痛感したこと。そこから始まった現地の人々との対等な交流こそが、グロボラが私にくれた最大の学びでした。

帰国後、再度訪問する機会を窺っていましたが、コロナ禍により海外渡航は困難になりました。そこで、国内での活動として「難民映画祭」の開催に奔走しました。また、大学3年次からは報告書の制作を担当し、気づけば院2年までその役割を全うしていました。歴代のグロボラを築いてきた先輩方の声を一冊にまとめる作業を通じ、改めてこのプログラムが参加者の人生に与える影響の大きさを実感しました。

大学院を卒業した現在は、商社でオーストラリアのエネルギー関連案件に携わっています。専門だった医工学とは異なる道ですが、ウガンダで培った「現場のリアル」に向き合う姿勢や、多様な価値観の中で合意形成を目指す粘り強さは、今の仕事の大きな支えとなっています。

これからグロボラに挑戦する皆さん。グロボラは単なる授業ではありません。自分の限界を知るだけでなく、生涯の友や、人生を共にするパートナーといった「かけがえのない出会い」が得られる場所です。現に、私が学生時代に憧れたあの報告書を書いていて、当時相談しに行った先輩が、現在の妻です。私たちを繋いでくださったのは、紛れもなくこのグロボラと佐々木先生でした。

先生がいつか退職され、夢である「世界中の卒業生を訪ね歩く旅」に出られる際には、ぜひ世界のどこかの国で、またあの頃のようにグロボラについて熱く語り合える日を、夫婦共々、首を長くして待っています。皆さんもぜひ、自分だけの物語を求めてグロボラの扉を叩いてみてください。

私とグローバル・ボランティア

2025年度国際教養学部卒業 皆上 直香さん

- 1 大学2年の春から、千葉県内の小学校や高校で、主にスリランカにルーツをもつ子どもたちとの日本語交流活動に関わる
- 2 大学2年の夏にラオスに渡航し、子どもの日本語教育に関わる活動に参加する
- 3 大学3年の春から千葉県内の地域学習支援教室にてボランティア活動に従事する
- 4 大学3年の秋～冬に多文化フリースクールちばにて日本語アシスタントの活動に参加する。その後もスポーツデーなどで交流を続ける
- 5 4年生の夏に外国につながる子どもたちを招いたワークショップに参加する

2020年度文学部卒業 川上 敦士さん

- 1 2017年11月 大学1年の冬、グロボラ学生が運営する映画上映会に、友人とふらっと入り、「シリアに生まれて」に衝撃を受ける。翌年立ち上がった学生団体に参加
- 2 2018年8月 グロボラで、ウガンダのストリートチルドレンを支援するNGOへ
- 3 2020年1月 映画上映会の企画・運営側として「シリアに生まれて」を上映する
- 4 2024年～現在 NPO法人多文化フリースクールちばで事務員・日本語講師として働き、グロボラの大学生を受け入れる側に

2025年度国際教養学部卒業 大屋 涼香さん

- 1・2 大学2年の春から、千葉県内の小学校で、主にスリランカにルーツをもつ子どもたちとの日本語交流活動に関わる
- 3 大学4年の夏にスリランカ渡航のプログラムに参加し、現地で学校訪問や卒業研究を行う
- 4 JICA海外協力隊のスリランカ派遣に応募。将来はグロボラのように、日本や「途上国」をつなげる留学事業に携わりたいことを志す



○古谷 それでは2025年度グローバルボランティアの座談会を始めたいと思います。よろしくお願いします。まずは自己紹介から。私は教育学部4年の古谷那奈です。1年生の時にベトナムにグローバルボランティアで留学しました。

○畑 国際教養学部4年の畑陽奈です。私は今年度の国内のプログラムに参加しました。

○小形 国際教養学部3年の小形美結です。私は今年の夏に Bangladesh のプログラムに参加しました。

○峰久 国際教養学部2年の峰久輝星（キラリ）です。今年、スリランカのプログラムに参加しました。

○笹山 国際教養学部1年の笹山哲平です。今年の夏、Bangladesh のプログラムに参加しました。

○永田 国際教養学部2年の永田芽久です。私も今年の夏に Bangladesh でグローバルボランティアに参加しました。

○古谷 皆さんありがとうございます。今年は3つのプログラムがあったそうですが、それぞれのプログラムでどんなことをやったのか、聞きたいなと思います。では、国内プログラムからお願いします。

○畑 はい。今年の9月後半に、外国にルーツを持つ子どもが集まって、一緒にワークショップみたい

なイベントをしました。1つはキャンパスツアー。子どもたちを千葉大学構内に案内しました。そしてもう1つは「身近なモンスターを作ろう」という名前のイベントでした。自分にとって怖い人とか、おそれ多い人とか、そういう人を想定してもらって、それをフェルトで表現するっていうのを、アーティストの人がきてくださってやりました。1人1つ、何か想像・想定してもらって。私の班にいた子ですごく印象的だったのが、「ビールを飲みすぎて赤くなってるお父さん」というのを想定した子がいて、それをトマトで表現して、トマトで顔をつけてビールを持ってるみたいなのをフェルトで表現して。なんかもう創造力もすごいし、それを表現するやり方もすごい頭が柔らかいなって思って。外国にルーツを持つ子どもだから、日本語の先生が怖いとか、そういうのも想定したりして、やったっていう感じです。

○古谷 ありがとうございます。では、Bangladesh のグループは？

○永田 はい。Bangladesh では10日間ほど滞在したんですけども、3つぐらいのパートに分かれてました。ひとつめは、Dhaka という一番大きな都市

のパート。2つめは、Academy というエクスマトラが運営してる児童施設みたいな感じのところに2泊3日ぐらい訪問しました。3つめは、Ubinig という NGO の有機農業を積極的にやっている施設に訪問しました。最初のDhakaパートでは、Bangladesh の市場だったり、スラムとかに訪問して、Bangladesh のカオスな雰囲気とかエネルギーをすごい感じました。他にもストリートチルドレンとの交流もあって、子どもたちと運動会をしたりしました。Academy のパートでも、子どもたちとの交流があったり、働いてる女性との交流もありました。最後のUbinigでは、有機農業をどうしてやっているのかだったり、どういうふうに運営しているのかなどを学びました。

○古谷 10日間ですごい盛りだくさんだったんだね。哲平くんは、どれか印象に残ったとかある？

○笹山 やっぱりDhakaパートの時に、スラムの中に入れてもらったりとか。そのスラムで働いている人の「リキシャ」、Bangladesh で結構主要な交通手段で、日本の「人力車」が語源になってる…。人力車が交通手段で、それを漕いでるっていうか…引っ張ってる人の話を聞いたり、あとスラムの中の家庭に入れてもらって、生活の様子の話とかそういうのを聞かせてもらって…。でもなんかみんな幸せそうで、楽しそうに生活してて、それが印象に残りました。

○古谷 最初は、そういうイメージはなかった？ ちょっと暗い感じのイメージがスラムにはあるけど。

○笹山 そうですね。はい。でも全然。子どもたちもいっぱいいて、楽しそうに遊んで過ごしてて。

○古谷 結構興味持って来てくれたみたいなの？

○永田 そうですね。「日本人？」みたいな、聞いてくれて。

○古谷 なかなか入って入ってこないのかな、スラムの中に。外国人というか。

○小形 確かに、外国じゃ行かないしね。そういう部分って。

○古谷 グローバルボランティアだから行けた場所みたいな感じだね。美結さんは？

○小形 私も印象に残ってるのは、人々の、すごい、エネルギー。さっき哲平くんも言っていたみたいに、みんなすごい話しかけてくれるし。私、最初はみんなすごい困ってるんじゃないかとか、そういう先入観とか持ちちゃって行ってたんですけど、全然そんなことなく。「家族がいるから幸せ」とか、「すごい毎日楽しい」みたいな、そういうふうなことをたくさん聞けたので、自分がすごいちっちゃいことで悩んでるような、自分がすごいちっぽけに思えてくるなって思いました。

○古谷 現地の人と結構話す時間が持てた？

○小形 うん。現地語を話せる通訳の方とかもいてくれたし、街中でも英語が通じるので、市場で会った人に話しかけてみたり。「学生なの？」とか聞かれて「日本人」と言ったら、「Oh! Japanese」みたいな感じで言ってくれて。私たちが幸せな気分をもらえました。ベンガル語が現地語なんですけど、それも何か基本的なものをちょっと教えてくれたりして。なんか市場の人とかと現地語で価格交渉をしてみたり。

○古谷 えー！ 価格交渉？

○小形 そう。これは何？ みたいな。で、結構いける。「キー」は「これ何？」みたいな。



○古谷 勉強みたいな感じ以外でも、生活みたいなところに入り込めた感じだった？

○小形 そうですね。結構現地の住民と関わったり。

○古谷 へえ、すごい楽しそうです。じゃあ、スリランカのことについて教えてください。

○峰久 はい。えっと、本当にいろんなところに行っただって感じで…。北から南に東から西まで本当にたくさん移動したって感じなんですけど、キーワードを分けるとしたら、医療と教育で分けられるなど。まず病院2カ所を見学させてもらったんです。グループの中に看護学部の子が1人いたので、ICUとかまでその子は特別に入らせてもらったりとか、いろいろ学ばせてもらったなって印象ですね。学校も2つぐらい見学させてもらって。スリランカの中では、エリート層の子が通うような中高一貫校、男子校に行って、日本の文化について紹介したりとか。一緒におにぎり作ったり、その味見してもらったりして、楽しかった思い出がありますね。

○古谷 スリランカも10日間ぐらい行ってた？

○峰久 そうです、14日間。僕たちはバスを貸切というか、コーディネーターさんの知り合いのバス運転手さんにずっとついてもらって、バスで1日3時間とかは優に移動してるって感じでしたね。

○古谷 すごい。じゃあ本当にスリランカ全体回って、学んで遊んでみたいなことをしたんだ。おにぎり作ったのがすごい楽しそうだなと思って。

○峰久 味としては昆布とか梅とか何種類か持って行ったんですけど。その味を教えずに配って行って、梅食べた子はやっぱり顔がすごい面白かった。

○古谷 へえ。みんなおにぎり好きだった？

○峰久 めっちゃ美味しい美味しいって言ってくれ

て、早くちょうだいみたいな。折り紙も一応持ってってたんですけど、折り紙もめっちゃ人気でした。

○古谷 何語で喋ったの？子どもたちと。

○峰久 子どもたちは英語もしゃべれる子が多いので、英語でしゃべってたんですけど、シンハラ語っていう言語があっちではメインなので、簡単な「おいしい」とか「ありがとう」という単語は教えてもらったりしながら、基本的には英語で話しました。

○古谷 そうなんだ。じゃあちょっと話題を変えて。今回のプログラムで学んだことを通して、今後生かしていきたいこととか、今後こういうことに挑戦してみたいっていうことがあったら教えてほしいんだけど。

○小形 やっぱり行く前は結構なんかみんな困ることがあるんじゃないとか、そういう気持ちで行ったんですけど、でも実際行ってみたら、なんかもっと人のエネルギーがあったり、私たちの想像の及ばないところで困ることがあったりして。やっぱりそういうのって実際に行ってみないとわからないなっていうのは、今回バングラデシュに行っただけで痛感しました。私、もともと国際協力とかに興味があったんです。何を考えるにしても、どこの国のことを考えるにしても、その国に行って実際に人と関わってみようかなって思いました。今後の将来のこととか考える上ですごいいいきっかけになりました。

○古谷 うんうん。なんか留学っていうと語学留学っていうのが多分1番最初に思い浮かぶけど、グローバルボランティアってその地域に近い形で、とか、人との関わりがすごい多いプログラムだなって私思ってた。そこだからこそ学べることっていうの

がすごいあるなって思って。じゃあ今度、キラリくん。

○峰久 そうですね。帰ってきて1番思ったのは、まだいたかったなというか、もうちょっとスリランカで学びたかったなっていうのが率直な意見で。あっちで感じたこととして、やっぱり途上国とか言われているけど、やっぱり行ってみたら本当に豊かだなって思うところがたくさんあって。そういうところはあるんですけど、やっぱり高校生とかと話していると、日本で働きたいとか、自分の国に対してあんまりポジティブに思えてないところがある。でも日本人の僕からしたら、いや、スリランカもやっぱりいい国だよって思うところもあって。そういうのを考えると、その発展とか成長っていうところの言葉に、これまでよりも深く考えるようになって。そういうスリランカの豊かなところを残しながら、こう…発展というか、幸せな人が増えるにはどうしたらいいかなってところを、これまで以上に具体的に考えられるようになったなって思って。なんか持続可能な開発とかよく言うけど、スリランカ行ってからイメージしやすくなったなというか。例をもって考えるようになったかなと思うので、これからの大学生活につながるかなと思いました。

○古谷 そうだね。具体性を持ってなんかイメージができたというか、実際に見て、リアルになったというか。子どもたちが、自分たちのところが豊かかっていうか、なんかいいところを探すのって多分ちょっと難しくって。比較っていうのはあんまりいいか悪いかよくわかんないけど、キラリくんは日本も見てスリランカを見て、日本にはない良さとか、スリランカだからある良さとかが見えた

からいいなっていうのがすごい思えたのかなって思って。子どもたちがスリランカが、こういうところがいいだっていうのがわかるきっかけというか、そういうのがあったらいいなっていうのを聞いて思いました。

○畑 国内のプログラムに参加して、日本にいらでも本当に探せばいくらでも交流は持てるなっていうふうに思って。私はもう4年生なので、こういう授業を通してっていうのは、どうしても難しくなってしまう。自分からもっと見つけに行かなきゃいけないってのをすごく感じました。ここで終わりにしちゃうのはもったいないっていうか、社会人になったらもうブツンって切れるのが嫌だなってすごく思ってる。何らかの方法でやっぱり外国ルーツの子ともっと関わったりとか、時間が許せば海外に行って現地の人と交流してとか、ボランティア参加してとかできる大人になりたいなって思います。

○古谷 いや、そうだよ。グローバルボランティアはやっぱり大学の授業としてあって、機会とかも作ってくださったりしてるから、そのきっかけとして1回目っていうのが、すごい行きやすい環境が整ってるなって思う。2回目、3回目も行きたいって思う。

○畑 だから今、1年生の人は、本当にいい時に行っただって、めっちゃ思う。1年生とか2年生、3年生も、まだまだ時間も進路の選択肢も絶対あると思うから、色んなところ行ってみたいなって。挑戦してみたいなって思います。

○古谷 参加しようかなって迷ってる人に向けて一言、哲平くん。



古谷 教育学部 4年
ベトナム



畑 国際教養学部 4年
子どもとの交流プログラム



小形 国際教養学部 3年
バングラデシュ



編集後記

今年度は、2年ぶりに佐々木先生とグロボラが帰ってきました！そして、待ちわびていたかのように、5月に行われたグロボラ説明会には、私たちの想定を越えた人数の学生が話しを聞きに来てくれました。中には、大学入学前からグロボラをチェックしていた学生もいたようです。私もグロボラ再開を待っていた一人でしたが、今年度のプログラム参加はかなわず、座談会で話が聞けることを楽しみにしていました。経験を語る皆さんの顔は晴れやかで、「良い経験をしてきたんだろうな」と思い、こちらもうれしくなりました。プログラムが終わって早4ヵ月。薄れ始める現地で感じたリアルな感情に、戸惑いを覚える学生もいるのではないのでしょうか。そんな時はぜひ、自分の経験を誰かに語り、そして新たな挑戦を試みてください。グロボラは、人々と地域と密に関わりながら活動ができる、それを通して自らが感じ取った思い、生まれた感情は、皆さんの真髄として残り続けるものだと思います。これからの活躍を楽しみにしています。そして、行くか迷っている皆さん、「迷っているなら絶対行くべき」。そう声を合わせて参加者は言うと思います。勇気を出して、新しい世界に飛び込んでみませんか。

最後に、履修生の皆さん、本活動報告書の企画作成に携わってくださった皆さん、そして佐々木綾子先生、本当にありがとうございました。



○**笹山** 本当に…なんかもう行った方がいい。もう迷ってるんだったら絶対行った方がいいなと思う。行って損はない、ってか、行って悪いこと何もないし。行って自分の世界も広がるし。自分の考えも深まるし。いや行くべきでしょ（笑）。迷ってるんだったら行きな、行きなさい。

○**古谷** ありがとうございます。今になって聞くのあれなんだけど、きっかけ。

○**笹山** たまたまメールを見て、知って。バングラデシュとスリランカってあって、バングラデシュは、もともと行ってみたいと思ってたのもあった。あと渡辺さんっていう方が、エクマットラっていう、ストリートチルドレンを支援してる団体のツアーに参加する形っていうので、間近で実際の活動の様子見れるのかなって思った。元々自分も国際協力とか世界中で困ってる子どもたちに関心…関心っていうとなんかおかしいけど…。なんか自分にできることないかなっていうのを思って。で、その実際にやってる方を間近で見れる…で、その人からいろいろ学べるっていうのは絶対いい機会だなと思って、すぐ行こうって思ってって感じです。

○**永田** きっかけは、私もたまたまパンフレットみたいな…、説明会とかも行っていくうちに「あ、行きたい」みたいな。私も元々国際系の問題っていうのに興味があって。でも自分にできることって何か分からなくて…とか、関わり方っていうのにすごい悩んで。で、そのバングラデシュに行ったら何かつかめたり、何かのきっかけになったりするかなと思って行ってみたいって思いました。

○**小形** 私のきっかけは、もともと大学に入る前からグローバルボランティアで行きたいなって思って

たんですね。千葉大っていろんな留学のプログラムあるじゃないですか？ その中でも、グローバルボランティアって、多分、この大学のこの期間にしか行けない国、とか経験だして思ってたんですけど。スリランカとバングラデシュが選べてって中で、このバングラデシュの、そのさっきも言ってたエクマットラを運営してる渡辺さんのことを授業で知ってたっていうのもあって。あとはスラムとかにも興味があったので。NGO 団体ってやっぱりすごいなかなか収益とかも難しい中で、でもやっぱり必要とされている仕事だから、みんなどういふ思いでやって、どういうふうに関わってるんだろうなっていうのに興味があって行きました。

○**峰久** 僕も千葉大を選ぶとき、同時期くらいにグローバルボランティアのことも知って「入ったら行きたいな」くらいに思ってたんですけど。例えば交換留学とか高校生の時は「●●学」とか言われてもちょっとあんまりイメージが湧かなくて、ちょっと遠い存在だったんです。でもグローバルボランティアだとまだイメージつきやすくなって感じて、結構視野には入れて。[なんかグローバルボランティア行きたくな？]みたいな。「あ、俺も行きたいと思ってた」みたいな感じで。友達とそこで語るみたいな時間もあって、「あ、絶対行こう」ってそこで気持ち固まったみたいなありますね。

○**古谷** 一緒に何か挑戦する仲間というか、一緒に行く人がいるっていうのも結構心強いというか。1人じゃ行けないけど、みんなとならみたいなのもあるよね、確かに。それでは、これで2025年度のグローバルボランティアの座談会を終わりたいと思います。ありがとうございました。



峰久 国際教養学部 2年
スリランカ



笹山 国際教養学部 1年
バングラデシュ



永田 国際教養学部 2年
バングラデシュ



**CHIBA
UNIVERSITY**